二、吉村昭作品考　医学史関係

酒井シヅ
順天堂大学

作家　吉村昭氏は一九二七年五月一日に東京日暮里に生れた。青年時代を肺結核で療養生活を送り、肺切除術をうけてまさに九死一生を得て、一九四七年頃より文学を志す。学習院大学に入って文芸部で活動して作家の道に入る。大学では必須科目の運動を得意としなかったことから卒業をあきらめて中途退学となった。

以下に示すような数々の文学賞を受賞した。

一九六六年『星への旅』により第二回太宰治賞、一九七三年『深海の使者』もより第三四回文芸春秋読者賞、一九七三年『戦艦武蔵』『関東大震災』などに対して第二十回菊池寛賞、一九七九年『ふぉん・しーぼるとの娘』により第十三回吉川英治文学賞、一九八五年『冷たい夏・暑い夏』により第二六回毎日芸術賞、『破獄』により第三六回読売文学賞、第三五回芸術選奨文部大臣賞、一九八七年日本芸術院賞　一九九四年『天狗争乱』により大佛次郎賞など各賞を受賞。この間、芥川賞候補に四回（『鉄橋』『貝殻』『透明人間』『石の微笑』）なっ

た。さらに一九九八年第一回司馬遼太郎賞に推挙されたが辞退した。吉村氏の司馬歴史小説に対する見識が現れたといえる。

一九九七年日本芸術院会員になる。二〇〇六年日本芸術院第二部長に在任中に発病して辞任した。

二〇〇六年七月三一日死去　七九歳

吉村氏の作品の特徴は徹底した資料調査による記録歴史文学である。きわめて速筆であったことが有名であった。最後の作品『彰義隊』は朝日新聞の連載小説であったが、連載を始めた時は完成していたという。遺著となった作品は二〇〇五年一一月に朝日新聞社から出版された。

主な医学関係の作品に次のものがある。

〔短編・中編小説〕

『青い骨』

死体（一九五二年　赤絵）白い虹（一九五三年　環礁）青い骨（一九五五年　文学者）白衣（一九五六年　Z）さよと僕たち（一九五七年　Z）墓地の賑わい（一九六一年　文学者）

『透明人間』自選短編集　一九九〇年　学芸書林

鉄橋（一九五八年　文学者）少女架刑（一九六〇年　文学者）透明人間（一九六一年　文学者）石の微笑（一九六二年　文学界）煉瓦塀（一九六四年　文学界）

『日本医家伝』一九七一年　講談社「ＣＲＥＡＴＡ」に三年連載

山脇東洋　前野良沢　伊東玄朴　土生玄碩　楠本いね　中川五郎治　笠原良策　松本良順　相良知庵　荻野

ぎん　高木兼寛　秦佐八郎

『星への旅』　一九六六年八月　展望

『吉村昭自選短編集』　一九七八年　読売新聞社

『死顔』　二〇〇六年一一月　新潮社（『新潮』二〇〇六年一〇月号）

〔長編小説〕

『神々の沈黙』　一九六九年　朝日新聞社

『細菌』　一九七〇年　講談社

『冬の鷹』一九七一年　毎日新聞社

『北天の星』上・下　一九七五年　講談社

『ふぉん・しーぼるとの娘』上・下　一九七八年　毎日新聞社

『消えた鼓動』　一九七一年　筑摩書房

『光る壁画』　一九七一年　新潮社

『冷たい夏・暑い夏』　一九七四年　新潮社

『長英逃亡』上・下　一九七四年　毎日新聞社

『白い航跡』上・下　一九九一年　講談社

『落日の宴』　一九九六年　講談社

『長英逃亡』　一九九七年　毎日新聞社

『大黒屋光太夫』上・下　二〇〇三年　毎日新聞社

『暁の旅人』　二〇〇五年四月　講談社

〔随筆〕

『精神的季節』　一九七二年　講談社
　文学　医学　戦争　社会　家庭
『患者さん』　一九七四年　毎日新聞社
『白い遠景』　一九七九年　講談社
　戦争と〈私〉　取材ノート　社会と〈私〉　小説と〈私〉
『蟹の縦ばい』　一九七九年　毎日新聞社
　土龍のつぶやき　蟹の縦ばい　原稿用紙を前に　味ある風景　遙かなる日々　亭主の素顔
『冬の海』　一九八〇年　筑摩書房
　中川五郎治について―「北天の星」
『歴史の影絵』　一九八一年　中央公論社
　種痘伝来記　洋方女医楠本イネと娘高子
『遅れた時計』　一九七二年　毎日新聞社
　遺体引取人
『旅行鞄のなか』　一九八八年　毎日新聞社
『わたしの流儀』　二〇〇三年　新潮社
『私の引出し』　一九九七年　文芸春秋
『私の好きな悪い癖』　二〇〇一年　講談社
『縁起のいい客』　二〇〇三年　文藝春秋

『回り灯籠』二〇〇六年一二月　筑摩書房
きみの流儀・ぼくの流儀　城山三郎

等がある。

右に見るように、吉村昭氏には医学史および医学に関連した作品が多い。医学史の関係作品は、昭和四六年頃から広報誌「クレアータ」に前野良沢、杉田玄白ら、著名な医人の短編を連載することから始まった。そのとき資料調査に医史学研究室の小川鼎三教授を訪ねた。それをきっかけの吉村氏とわれわれの付き合いがはじまったのである。医家の伝記を十数人連載したあと、それらを『日本医家伝』にまとめて、昭和四六年に刊行された。その後、医学史を主題にした長編小説が、平成一七年の『暁の旅人』にいたるまでに何編も出版された。

その最初が前野良沢を克明に描いた『冬の鷹』（昭和四九年）である。この作品は前野良沢らが『解体新書』翻訳で味わった苦労を描いた作品であるが、後日、この時オランダ語を学び、ターヘルアナトミアの翻訳をしたと語っていた。そこに徹底的な取材をして、史実に忠実な作品を書く作家の姿がみられた。

次の長編はロシア漂流民、中川五郎治の種痘法伝来を描いた『北天の星』（昭和五〇年）であった。漂流民に強い作家であった吉村氏の本領が遺憾なく発揮された作品である。吉村氏は必ず現地を訪ねている。そこの地形をみて、風を感じ、現地の人から思いがけない話を聞き出すことで執筆への意欲が駆り立てられるようであった。

これに続く長編が『ふぉん・しーぼるとのむすめ』（昭和五三年）である。むすめ、いねを主題にした作品である。このために長崎、岡山、宇和島などいねの跡を追って現地取材している。そこでさまざまな資料に出会った。吉村作品は通説をなぞることはない。必ず、あらたな知見が加わり、そうかと、うならされることが多い。この作品もその一つであった。

吉村氏はときどきユニークな題材を見つけ出した作家でもある。昭和五六年の作品『光る壁画』は胃カメラの開発を描いた作品である。

その後、幕末の歴史小説の大作が続いたが、昭和五九年に『長英逃亡』が出版された。作家は書いているうちに、作品の主人公のなりきってしまうとよく話されていたが、この作品を書いているころ、町を歩いていて、追われている気持ちになり、物陰に隠れたなどのエピソードを聞いたことがあった。

平成に入ると、高木兼寛の生涯を書いた『白い航跡』が出た。慈恵医大の創立者高木兼寛について、海軍と脚気や慈恵医大に関連したものがたくさん出版されているが、吉村氏の『白い航跡』は修業時代から始まる。薩摩藩が平潟での戦いに参戦した記録を現地で確かめ、郷土史家の協力をえて詳細に描き上げている。

医学史に関する、最後の長編小説となったのが『暁の旅人』である。松本良順の生涯を書いた作品であるが、歴史小説はかく書くものかと感心し、論文を書くのと同じだと思った。それだけにこのような緻密な歴史小説を、高齢になっても書き続けたことに感嘆し、それが吉村氏以外にはみられなかったことを特筆したい。

吉村氏の作品には、歴史小説の外に医学についてのドキュメントがある。最初が昭和四四年に南アフリカの最初の心臓移植を書いた『神々の沈黙』、つづく『消えた鼓動』、ガンで亡くなった弟について書いた書き下ろし長編小説『冷たい夏、暑い夏』（昭和五九年）がある。死がテーマであった。吉村氏が自身、冷徹ともいえる姿勢での死を迎えられた。若いとき肺結核で死線をさまよったといわれたが、それからずっと死を見つめてきたことが反映したといえる。

吉村氏はしばしば司馬遼太郎氏と比較される。司馬史観は多くの人を惹きつける。歴史を現代流に読み解いてい

るからだ。一方、吉村氏は史実を克明に調べて、それをもとに構築した歴史小説である。

われわれの研究室は、吉村氏も司馬氏からも取材の協力を受けたが、吉村氏は必ず自ら取材に来られ、司馬氏は編集者がきて、本人は来たことはなかった。そのことも小説の性格の違いになっているのだろう。